

原則
A とめ、はね、はらいなどの違いは、表現の差であって字体の差ではない(字体の差は誤字と誤解しないよう教育的な配慮が必要である)・・・文化庁「常用漢字表」(S56内閣告示)
B 誤字となる場合 …… ①画数の違い ②読みが変わる決め手となる細部(例:未末、土土) それ以外はすべて正しい。(「漢字の常識」原田種成著 三省堂1982年)

A 学習指導要領解説(国語編)平成20年8月

第4章 指導計画の作成と内容の取扱い 2 第2の各学年の内容の)伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項)の取扱い(p106,107)

- ①漢字の指導においては学年別漢字配当表(学習指導要領)に示す漢字の字体を標準とすること
- ②しかし、この「標準」とは事態に対する一つの手がかりを示すものであり、これ以外を誤りとするものではない。
- ③児童の書く文字を評価する場合には、「常用漢字表」(昭和56年内閣告示)の「前書き」にある活字のデザイン上の差異、活字と筆者の楷書との関係なども考慮すること。

B 常用漢字表(S56内閣府)前書き

S56「常用漢字表」・・・字体と筆順については、30～39p及び裏見返しを参照すること

常用漢字表 30～39p 「漢字指導における字体・筆順について」

<前提>=字体とは文字の骨組みである。文字の構成単位は天画である。

- ①明朝体活字と筆写の楷書との形の違いは、表現の差であって、字体の差ではない。
- ②教科書体活字も、各教科書出版社によってデザイン的に作られたものであるから、微妙な違いが生じる。それを字体の相違(誤字)だと誤解しないよう教育的な配慮が必要である。
- ③指導は標準の書き方によって行い、テストなどにおける個々の筆者に対する評価は許容を心得ていて、教育的に行う。これが教育の場での原則であろう。
- ④教科書検定基準においても「書写される漢字の字体については、児童・生徒の習得の程度に応じて、「とめ:」「はね」などに関して活字とは異なった書写の便宜上行われている形であることを理解させる上に必要な配慮がされていること」と示されてきている。

【前書き】=④この表の字体は、これを筆者の標準とする際には、天画の長短、方向、曲直、つけるかはなすか、とめるかはねるかなどについては、必ずしも拘束しないものがある。(木、言、戸、令など)

H22、6、7文化審議会答申改定常用漢字表

字体・書体・字形については原稿を踏襲する。多様な字体=パソコンの普及による字形の違い。

C 常用漢字表改定に伴う学校教育上の対応について(H22)

- ①例えば、社会科等で用いられる都道府県名等の漢字の中には、学年別漢字配当表にないものもあるが、振り仮名を付けるなど、従前どおり、児童の学習負担に配慮しつつ、各学校において、児童及び地域の実態等に応じ適切に提示して指導することができるものとする。
- ②学年別漢字配当表に示された漢字の指導については、これまでどおり学年別漢字配当表の字体を標準として指導する。
- ③また、児童生徒が書いた漢字の評価については、文化審議会答申にある「(付)字体についての解説」を踏まえ、指導の場面や状況を踏まえつつ、柔軟に評価することが適当である。
- ④今回の常用漢字表改定の背景には、情報機器の普及といった状況がある。情報機器の利用が今後、更に日常化・一般化しても、漢字の習得に当たっては、小・中・高等学校のそれぞれの学校段階を通じて書き取りの練習を行うことが必要である。漢字を手書きすることは、漢字を習得し、その運用能力(例えば、情報機器を利用して文章を書く場合、複数の変換候補の中から適切な漢字を選択することなど)を形成していく上で極めて重要であるとした文化審議会答申を十分に踏まえる必要がある。

D 原田種成「漢字の常識」三省堂1982年

- ☆原田種成(漢文学者 大東文化大教授)
- ①漢字はその骨組みである天画の組み合わせが違っていなければ誤りではない。
- ②小中学校の漢字教育やテストの採点の実情を見ると、何を根拠にして、はねるか、とめるか、長いか、短いかを厳しくするのであろうか。漢字を専門としている筆写などはただただ驚きあきれんばかりである。
- ③厳しい採点は漢字嫌いをつくる。
- ④土と土、末と末のような、注意して正しくかき分けなければ別の字になることは厳しく教えるべきである。(雪と書の違いなども)

正	誤	正	誤
電	電	電	電
報	報	報	報
配	配	配	配
達	達	達	達
合	合	合	合
議	議	議	議
賃	賃	賃	賃
問	問	問	問
文	文	文	文
庫	庫	庫	庫
借	借	借	借

E 手書き文字の字形と印刷文字の字形に関する指針(仮称)

「常用漢字表の字体・字形に関する指針(報告)」(文化審議会国語分科会)の概要

漢字の字体・字形に関して生じている問題について、常用漢字表(平成22年内閣告示第2号)の(付)字体について、解説の内容をより分かりやすく整理し、発表します。

現在、社会で生じている問題

- 手書き文字(筆写)と印刷文字(活字)の印刷文字の字形に必要以上の注意が向けられ、文字の細部に注目して印刷文字の字形を評価する傾向が生じている。漢字の字形は、漢字の骨組み(天画)によって、漢字の正誤が決められる傾向が生じている。
- 手書きの楷書では、本来、「木」の骨組みに「令」を合して書くと、明朝体と似た形(「令」)に書きやすくなる。
- 常用漢字表(字体)について解説し、図示しながら、周知不足、合・令・木・木

「常用漢字表の字体・字形に関する指針(報告)」

○手書き文字と印刷文字の表示方法は、習慣の違いがあり、一方だけが正しいのではない。

○字の細部に違いがあっても、その漢字の骨組みが同じであれば、誤っているとみなされない。

○字の骨組みが同じでも、その漢字の骨組みが同じであれば、誤っているとみなされない。

○字の骨組みが同じでも、その漢字の骨組みが同じであれば、誤っているとみなされない。

手書き文字の字形の例

天 天 上の横線が長い、下の横線が短い

荘 荘 右下が「土」か「土」か

紅 紅 いとへんを「糸」とするが「糸」とするか

魚 魚 点の方向にいろいろな書き方がある

雨 雨 縦線を重直に書くか、斜めに書くか

真 真 中央上部の「一」をつけて書くか、離して書くか

矢 矢 右下をはらうか、とめるか

木 木 縦線をとめるか、はねるか

才 才 斜め線を交わるように書くか、交わらないように書くか

新聞や書籍では、明朝体という印刷文字が使われています。縦の線(縦画)を太く、横の線(横画)を細く表現し、横画のとめ(終筆)には、ウロコなどと呼ばれるはね上げたような三角形の形が付きま。

文化審議会国語分科会では、2年間にわたり「常用漢字表」の手当ての一つである、「手書き文字の字形」と「印刷文字の字形」に関する指針の作成について審議をしてきました。そしてこのたび、「常用漢字表の字体・字形に関する指針(報告)」(案)を取りまとめました。手書き文字と印刷文字の形が違っていても、どちらかを誤りとする必要はないこと、また、文字の骨組みが認められれば、細部に違いがあっても、誤った字であると考えなくてよいことなどが、豊富な具体例とQ&Aなどによって分かりやすく説明されていますので、是非御覧ください。

F 正進社ワークテスト平成28年版

TOSS News Letter

速報! 文化庁・文化審議会漢字小委員会が、指針案をまとめる!

認められた「多様な漢字の形」

これまでの採点は教師の感覚だった!

どの「雨」が正解でしょうか?

実は④以外、全部正解なんです!

文化庁の文化審議会漢字小委員会は、漢字の手書き文字について、「はねる」と「はねない」の違いを「細い違いで正誤はなく、多様な漢字の形が認められている」とを説明する指針案をまとめた。

今までに指針の確定作業を行って文化庁ホームページに掲載し、骨格化し決定している。

現在の常用漢字表でも、漢字には様々な書き方があり、細い違いは許容される。しかし、2014年度の国語に関する世論調査で、「はね」と「はねない」の向きなどの違いで、人によって正しいと考える字形が違っていた。

指針案では、点や線の長短や方向「つけか、はなすか」「はらうか、とめるか」「はねるか、とめるか」など、整理された。

同じ漢字として認められる事例を示した。常用漢字表にある金2136字でも、1文字につき2~3個、手書き例を示した。

学校のテストなどは、指導した字形以外の字形であっても、柔軟に評価するよう求める。

【読売新聞 2月10日付】

漢字採点シート

漢字採点シートは、平成28年度に改定された漢字表(訂正版)に基づいて作成されています。

漢字採点シートは、漢字の骨組み(天画)に基づいて作成されています。

漢字採点シートは、漢字の骨組み(天画)に基づいて作成されています。

漢字採点シート

漢字採点シートは、漢字の骨組み(天画)に基づいて作成されています。

漢字採点シートは、漢字の骨組み(天画)に基づいて作成されています。

漢字採点シートは、漢字の骨組み(天画)に基づいて作成されています。

G 補足「筆順について」

- ①「小学校で教えている筆順について」S33 文部省「筆順指導の手引き」=本書に取り上げた筆順は、学習指導上の観点から一つの文字については一つの筆順に統一されているが、このことは本書に掲げられたもの以外の筆順で従来行われていたものを誤りとするものではない。
- ②「筆順のすべて」(江守賢治著、日本習字普及協会1968年)=漢字というものは必ずしも一字一筆順と限っていない。原則①上から下へ②左から右へ「字」というものは筆の運びがスムーズで字の形がとりやすいように書くものである。
- ③「漢字の常識」(前掲書)=筆順という語は日本で作られた術語で大正元年東京女子師範学校同窓会編「国定読本漢字筆順」の書名が最初である。古くは「運櫃」